

令和4年 1月8日

言葉の処方箋

いい覚悟で生きる 樋野 興夫 P52

思い出すのもいやな 思い出ともつき合う

思い出をたぐる作業が、問題に立ち向かう勇気をもたらすことがあります。いやな思い出もときにはあなたの生きる力になります。

思い出は甘く、美しく、いいものばかりとは限りません。中には、思い出したくもない、いやなものもたくさんあるでしょう。親しい人とのいさかい、試験の失敗、裏切り行為、顔から火の吹き出るような恥…。こうした記憶は、ふだんは忘れていくかもしれません。思い出さないように心にふたをしているかもしれません。あるいは私のように、いやな思い出ばかりが頭にこびりついているという人も中にはいるかもしれません。

病床にいて、何かにとりまざれるということがないと、そんないやな思い出、心にひっかかることを、人は思い出します。そして、そういう思い出の中でもっとも気にかかるのは、人間関係にまつわることのようにです。

がん哲学外来を始めてから、人は病気になるとそれまで関係が悪化していた相手や反目し合ってきた人と「和解したい」という気持ちが募る、ということを知りました。

今後の予定 2月12日(土) 3月19日(土)

主催 岡倉天心記念 がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」

後援 一般社団法人がん哲学外来

ある患者さんの例です。消化器系のがんが再発し、自らの死を具体的に考えるようになりました。そのとき、親の遺産相続争いから、ののしり合い、もう何年も絶交したきりの弟のことを思い出したのです。

「兄貴風を吹かして、ぼくは弟とその家族を罵倒しました。二度と会うものか、兄でも弟でもない、と思いました。ところが、どうしても、その弟に会いたくなかったのです」

と、その患者さんは言いました。

私は、会いたいなら会ったらどうですか、と言いました。

「でも、今となっては会いに出かける体力もありません」

「それなら、弟さんのほうから来てもらったらどうでしょう」

「ああ、そうですね。でも、来てくれるかなあ」

それから何日かして、弟さん夫婦がお見舞いに見えました。両者の事情を心得て仲介してくれる人がいたようです。

兄も弟も、とくに謝罪の言葉は交わさなかった。それでも心は通じたのでしょう。笑顔と同時に、お兄さんの病状を思いやっつて弟さんは涙をめぐっていました。病院を出たあと、弟さんは実家のお墓参りをして帰られたそうです。ことの顛末を聞いて、私は患者さんに言いました。

「思い出すのもいやな思い出とつき合うのもいいものではないでしょうか」

「はい、思いもよらない贈り物をもたらしてくれました」

病床で思い出をたぐる作業が、自分の問題に立ち向かう勇気をもたらした例と言えるでしょう。

がんという大病になったとき、患者さんが抱える悩みは、病人としての悩みではなく、人間としての悩みです。謝りたいのに謝れない苦しさ、許したいのに許せない苦しさ。心の奥底でくすぶっていた罪悪感やうらみつらみから自分を解放するには、「許し合う」しかありません。このチャンスを逃してはならないのです。

あのとき反目し合った人に、お詫びをしたい、仲直りしたい、和解したい。このままではすまないという気持ちが募ったとき、この課題を果たすことが、「今の自分のなすべきこと」となって、患者さんに使命感を育みます。思い出すという行為は、もつれた糸もかたくなな心も、ほぐしてくれるようです。